

2013年3月5日

三重大学GP 2011・2012年度

多言語コミュニケーション力と国際感覚をあわせもつ人材の育成を目指す

「タンデム・ラーニング・プロジェクト」

—成果報告書—

人文学部 吉田悦子

1. 取組の目的

本取組の目的は、日本人学生と留学生との双方向的な学びを実現できるような「タンデム・ラーニング」という言語学習方法を取り入れ、既存のチューター制度を超えて、学生同士の学習支援活動と異文化交流を継続的におこなう基盤を提供し、多言語教育の強化により留学およびキャリア形成の質的向上をはかることである。

2. 二年間の実施状況

(1) 学部長をリーダーとし、副学部長、国際交流委員長、教務委員長、学生支援委員長、FD委員長が参加するプロジェクトチームを設置し、このプロジェクトを推進した。実施にあたっては国際交流委員会と学生自主活動グループ「おいでやす！」が中心となっておこなった。

(2) 2011～12年度に実施した活動は以下の通りである。

①2011年9月末に学生自主活動グループ「おいでやす！」立ち上げとメンバー募集をおこなった。

「タンデム・ラーニング」の運営と学部内交流イベントの企画・実施のための打ち合わせをおこなった。活動の連絡のために、活動メンバー登録とメーリングリスト、および留学生メーリングリストを作成した。メンバーとなった学生は、定期的に活動計画や内容について検討する話し合いをおこない、専用の掲示板にて情報共有した。さらに国際交流委員との合同会議を半年おきに実施した。

②留学生受け入れと履修サポートをおこなった。(10月初旬) さらに10月に渡日した留学生を中心に「おいでやす！」主催で留学生歓迎会 (Welcome Party) を実施した (2011年10月28日、2012年10月25日)。

③学部における教育や留學生活の現状について意見聴取するために、留学生向けに「留学生懇談会」(留学生向け「学部長と語る会」として2011年12月7日に実施)をおこなった。さらに人文学部の国際化に留学生がどのように貢献できるかという問題を考えるため、留学生の意識や現状の把握、またチューターサポートの希望について、留学生向けアンケートを実施した (2011年12月7日)。

④自主活動グループは、学生による自主的な多言語学習への支援として、「多言語・多文化」をキーワードにした交流イベントを企画・実施する。

・「第1回タンデム・ラーニング・ワークショップ」を開催した (2011年12月22日)。大河内朋子教授によるオリエンテーションとタンデム経験者によるアドバイスに続いて、ドイツ人留学生、中国人留学生、チューターの日本人学生らが実践活動をおこなった。

・プチ・ランゲージカフェを学期中およそ月一度開催した。留学生によるトークと参加者によるミニカフェ交流会、およびタンデム学習体験を以下の通り計8回と留学生カフェ1回をおこなった:「第1回ベトナム語講座」(2012年1月26日)「第2回スウェーデン語講座」(2月13日)「第3回ドイツ語講座」(4月19日)「第4回中国語講座」(6月20日)「第5回フランス語講座」(7月17日)「第6回イギリ

ス英語研修報告会 10月25日」「第7回スウェーデン語講座2」(10月30日)「留学生カフェ主催の韓国語講座」(11月28日)「第8回タイ語講座」(2013年1月17日)

⑤留学生就職支援の取り組みとして、人文学部主催(2011年度については企画協力:百五銀行)で、「留学生セミナー:日本で働く・母国で働くー三重と世界の架け橋を築く」と「留学生交流会」を2年連続で開催した(2012年1月19日;2013年1月31日)。

[2011年度]3人の留学生OBを講師に迎え、報告をしていただいた:李志友(覚田真珠株式会社営業主任)毛丹青(神戸国際大学教授)董培(P&Dパートナーズ株式会社代表)。続いて、「地元企業から留学生への期待、そして世界戦略へ」と題して、竹内桂一氏(マックスバリュ中部株式会社・人事部長)、チン・ショー氏(同中国事業担当プロジェクトチーム員)による報告があった。フロアの留学生から質問やコメントが出され、日本で働く留学生の役割とは何か、どのように職場内の人間関係に対応すればよいか、留学生としてのメリットデメリットとはなど、話し合われた(参加者35名)。セミナー終了後、交流会が開催された(参加者79名)。

[2012年度]2人の留学生OBを講師に迎え、報告をしていただいた:Lassalle Olivier(ラッサル・オリビエ)氏(元 エライ・ジャパン株式会社 プロジェクト・マネージャー)王 星月氏(鳥羽国際ホテル運営部)。続いて、人材育成センター事務局長、田中貢氏による報告。留学生からの質疑応答、三重県雇用経済部ものづくり推進課、人材育成グループ(沖中氏)、三重県中小企業団体中央会、創業・情報課(長谷川氏)、百五銀行からの現状報告、教育GPの取り組みの成果、おいでやす!活動についての報告を行い、今後の取り組みを模索した(参加者39名)。セミナー終了後、交流会が開催された(参加者93名)。

⑥大学への視察および関係者との懇談をおこなった。

・近畿大学「英語村」への訪問と懇談および国際交流室職員との懇談(学生3名・付き添い教員1名吉田が2012年2月23日に実施)。南山大学ワールドプラザ(WP)への訪問および関係者との懇談(学生2名・付き添い教員1名吉田が2012年11月28日に実施)

・大分大学国際教育研究センター・立命館アジア太平洋大学言語教育センターへの訪問・見学および懇談(吉田が2012年2月29・30日に実施)

・佐賀大学留学生センターへの訪問・見学および懇談(吉田が2013年3月6日に実施予定)

⑦留学生との研修旅行(2012年3月11日予備調査、5月実施。)

⑧新年度へのメンバー募集ポスターを作成。

⑨三重テレビの取材(2012年11月)、伊勢新聞の取材(2013年2月)を受けた。

(3) その他の活動

・授業活動である「留学生支援実践」(共通教育)が開催する「留学生カフェ」へ教員と学生メンバーが参加し、全学の留学生支援活動との連携を強化した。

・タンDEM・ラーニングの言語活動への参考のため、慶応大学で開催された「話し言葉の言語学」第3回ワークショップに参加した(2012年1月7日:吉田)。

・人文学部の学生ラウンジを活用して、スライド提示による全学・学部の海外協定校の紹介と共に、協定校への派遣留学生応募要項の周知をおこなった(前期、後期それぞれ一度)。

・人文学部オープンキャンパスにおいて、高校生向けの留学相談およびミニ・アンケートをおこなった(2012年、2013年8月実施。国際交流委員およびおいでやす!メンバー)。

3. 二年間の取り組みの成果

- ・学生自主活動グループ「おいでやす！」を日本人学生と留学生をメンバーとして立ち上げ、学部国際交流活動を推進する担い手として活動を開始し、その活動が定着しつつあることは大きな成果である。
- ・「留学生懇談会」「留学生向けアンケート」の実施は、留学生の意識や学部での現状を把握するのに大変有益であった。留学生の率直な声として、授業外活動における日本人学生とのつながりを強く希望しており、日本人チューターへの期待は勉学だけでなく、多岐にわたる。
- ・「タンDEM・ラーニング・ワークショップ」や「プチ・ランゲージカフェ」は、留学生の言語への関心を高め、外国語学習方法やランゲージ・パートナーのマッチングを検討するのに参考となった。これらの企画運営を通して、学生が、自ら国際交流活動に取り組む教育的・社会的意義を認識できた。さらに、マスコミ関係の取材の中で、学生たちがこの活動に取り組んでどのように成長したか、留学生や異文化に対する視点が変わったかという発言を行い、授業外活動で得られるものを実感することができた。
- ・「留学生セミナー」は、学部初の試みであったにもかかわらず、留学生にとって日本で就職して活躍している留学生OBは励みとなり、こうしたセミナーは両者を結びつける貴重な場となった。企業関係者が求める人材としての留学生への要望についてもこの場が大いに活用された。また、県庁の支援室や中小企業関係者の参加もあり、今後、人文学部として留学生の就職支援に関して組織的に取り組む必要性を感じさせた。「留学生交流会」では、学生自主活動グループが企画段階から積極的にかかわり、留学生スタッフも運営に大きく貢献した。このように、学部主催行事と学生自主活動グループ「おいでやす！」との連携が強まったことは大きな成果である。
- ・先進的国際交流活動の取組をすでに実践している大学への視察および関係者との懇談は、今後の活動にとって大いに参考になった。(1) 近畿大学「英語村」に参加した学生たちは、アクティビティと呼ばれる英語実践活動に参加し、学生ボランティアグループと英語でミーティングをおこない、今後の言語学習の大きな刺激となった。この英語村プロジェクトの企画・運営は、全面的な大学の支援を受け、専任スタッフと学生ボランティアグループに支えられており、言語実践を通して背景にある英語の精神文化を知ることにつながっている。南山大学 WP は、対照的に、日本人学生と TA が中心となり、外国語学習をどう日常の生活に取り入れ、継続、発展させていくかという運営方針が参考となった。(2) 大分大学国際教育研究センターでは、センター専任教員との懇談により、留学生支援（特にチューターと国際交流ボランティア会の活動）、海外協定校との留学プログラム、派遣留学生の派遣と受け入れ状況についての現状と問題点について意見交換を行うことができた。(3) 立命館アジア太平洋大学言語教育センターでは、専任教員および教務部・学生部の専任スタッフとの懇談により、言語教育の現状、海外協定校との留学プログラム概要、学生の自主活動を支援するプロジェクトについて意見交換を行うことができた。いずれの訪問においても、国際交流活動の推進においては、教員と職員との緊密な連携（とくにプロジェクト専任スタッフの貢献が大きい）、地域密着型のイベント実施などの取り組み、学生グループが活動推進の原動力になっていることがわかった。

4. 今後の課題

- ・二年間の成果をふまえ、さらに改善と工夫が必要である。
- ・学生自主活動グループと国際交流委員会との連携は今後の課題である。活動の進捗状況は逐次報告を

おこない、少なくとも半年に一度は活動状況や活動計画について共有する機会が必要である。また、活動にもっと留学生の関与を強めるために、留学生をグループの役員にすることができると望ましい。留学生のチューターについても、教員からの要望に応じて、活動グループから必要な留学生に日本人チューターを紹介する、などの支援を今後も行っていく。

- ・交流活動を学内活動だけにとどめず、地域社会活動も射程にいったより開かれた場面へ対応し、学生の自主性や社会性向上がさらに活かされるような取り組みが必要である。とりわけ、キャリア支援の一環として位置づけ、コミュニケーション力、リーダーシップ、調整力、協調性の向上へとつながる形で学生の成長を応援したい。

- ・留学生のニーズをとらえて、授業外活動における日本人学生とのつながりや交流の場を継続して設けることや、留学生の進路相談や就職支援に学部としても組織的に取り組む必要があるだろう。

- ・教育GPとしての成果を発信していくための体制作りも今後の課題である。以下のような点に留意する：

- （イ）適宜ホームページに活動記録を記載し、教育GPとしての取り組みについてサイトを設け、さらに充実させる必要がある。（ロ）活動の成果について実際に検証する。教育GPの目的をかみ砕き、落とし込んだチェック項目を用意し、達成度合いを把握する。（ハ）最終成果報告書の作成。

- ・留学生向けの日本語学習支援能力を育成するために、共通教育の授業活動として、「学習支援実践III（日本語）」を2012年度前期（水9・10限）に開講した。今後も留学生支援の一環として全学との連携を継続し、留学生を授業に活用する方法も検討したい。